

(4) MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査 ～男性とセックスをする男性向けの出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査

研究分担者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究代表者：樽井 正義(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究協力者：野坂 祐子(大阪大学大学院)

三輪 岳史(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

大槻 知子(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

山口 正純(武南病院)

研究要旨

本研究は、MSM における薬物使用と HIV 感染の予防を促進する啓発資材を開発することを目的としている。それに資するため、MSM (男性とセックスを行う男性 /Men who have Sex with Men)の出会いに関連した環境が個人の性行動や薬物使用行動に与える影響を把握することを目的に 2016 年に実施された調査データを用いて、ゲイ・コミュニティの動向等に詳しい MSM インフルエンサーを対象としたフォーカス・グループ・インタビューを実施し、さらなる検討を行った。使用したデータは、2016 年 9 月 22 日～同年 10 月 22 日に実施した、GPS 機能付きの出会い系アプリを利用するゲイ・バイセクシュアル男性(トランス男性などを含む)の薬物使用や性生活等に関する自己回答式インターネット調査(LASH(Love Life and Sexual Health)調査、以下「LASH 調査」という)の結果であり、本研究のインフォーマントとして 6 名の MSM の協力を得た。その上で、データの解釈や MSM の薬物使用に係る効果的な啓発活動についての意見を、フォーカス・グループ・インタビューの形式で聴取した。インタビュー内容から、①データ解釈、②啓発活動のヒント、③啓発活動の提案の 3 つの要素を抽出した。参加者の多くは、薬物使用に関する結果はその種類によって解釈が異なること、啓発活動には多様な場所や媒体を用いるのが効果的であること、薬物以外で自己肯定感を上げた当事者の声を啓発活動に活用すること、といった意見が多数挙げられた。薬物を使用している、あるいは将来的に使用する可能性のある MSM に効果的にメッセージを届けるために、「LASH 調査」で得た量的データと、本研究の質的データの双方を活用し、既存の考えに捉われない薬物仕様に関する啓発活動を開発していく必要がある。

A 研究目的

海外では、MSM は一般集団と比べて薬物使用の割合が高いことが報告されている(Hunter et al., 2014)。日本の HIV 陽性の MSM においても同様の傾向が示唆されており、ハッテン場やゲイ向けクラブ等での薬物の使用を目撃したり、セックスの相手から勧められたりしたことがきっかけとなって、薬物使用が開始される場合があることが確認されている(生島ら、2015)。

本研究班の前研究課題においては、GPS 機能付きの出会い系アプリを利用するゲイ・バイセクシュアル男性(トランス男性などを含む)を対象に、薬物使用や性生活等に関する自己回答式インターネット調査

「LASH 調査」を 2016 年 9 月 22 日～同年 10 月 22 日に実施した。2018 年度の報告では、薬物使用の傾向を含めた「LASH 調査」の単純集計に加え、日本の MSM を取り巻く環境には、身近に薬物使用が存在することが明らかになり、また、薬物使用は HIV 感染リスクの高い性行動や逆境的小児期経験と強い関連がある可能性が示唆された。

本研究では、MSM における薬物使用と HIV 感染の予防を促進する啓発資材を開発することを目的とする。1 年目に、海外の啓発資材を参考にしつつ、先行研究(LASH 調査報告書)の量的データについて、MSM コミュニティの情報発信者への面接調査を行い、その質的な解釈と啓発活動への示唆・提案を導出した。これを踏まえて 2 年目に、予防、検査、薬物

使用等のデータを精査・分析し、HIV 感染と薬物使用を予防するより効果的な啓発メッセージや手法を検討する。2年～3年目に、コミュニティのメディアとの連携により、MSM 若年層を主対象とする HIV 感染と薬物使用を予防する啓発メッセージを発信し、3年目に認知度を測定する。

そこで1年目には、より効果的な HIV 予防・薬物防止啓発活動を実施するためには、「LASH 調査」の結果に対するゲイ・コミュニティの動向に詳しい人の声を聞き、どのような啓発活動や支援策が効果的かを探ることを目的に、薬物使用に至る背景要因を質的な視点でも明らかにしていくための調査を実施した。

B 研究方法

調査参加者は全員ゲイ・バイセクシュアル男性であり、首都圏を本拠にゲイ向けの情報発信を行っている20代～40代のインフルエンサー（世間に与える影響力が大きい行動を行う人物）である。研究分担者個人のネットワークを活用して候補者に調査目的と方法を提示し、本調査への参加は自由意志であることを説明した上で、自主的な参加を募った。本調査はフォーカス・グループ・インタビューの形式を用いて実施した。まず、参加者へ「LASH 調査」の結果を提示し、その上でデータの解釈や MSM の薬物使用に係る効果的な啓発活動についての意見を聴取した。

インタビュー内容は参加者の了解を得て録音し、逐語録として記述した。それらのデータから、データ解釈、啓発活動のヒント、啓発活動の提案の要素を抽出した。分析は、量的調査の結果は当事者にどのように受け止められるのか、そして今後どのような活動を行えばより効果的に薬物使用者へ啓発メッセージが届くのかに注目して行った。インタビュー中に登場した個人を特定しうる情報やエピソードは、内容に差し支えない範囲で加工した。

C 研究結果

1. 参加者の背景

調査参加者は合計6名であり、いずれもインターネット/テレビなどで主にゲイ向けの情報発信に携わっているインフルエンサーである。インタビューは2019年2月6日と2月20日の2回に分けて、東京

都内で行われた。各回の参加者の概要は以下の通りである。

各回の調査時間は、120分であった。

回	参加者	年代	主な活動
第1回	A	40代	MSM 向けニュース配信
	B	30代	動画配信者
第2回	C	40代	タレント、パフォーマー
	D	20代	MSM 向けニュース配信
	E	30代	編集者・ライター
	F	20代	MSM 向けニュース配信

2. 結果

インタビュー調査の結果を分析し、以下の3点の内容を中心に抽出した。①データの解釈、②啓発活動のヒント、③啓発活動の提案。なお、インタビューでの参加者の発言は「」で示し、イタリック体のフォントで記載した。

1) データの解釈について

友達や知り合いに陽性者がいても HIV を身近に感じない

本研究の量的調査では、友達や知り合いに HIV に感染している人はいるのかという質問と、HIV の身近度について尋ねた質問の回答割合に若干の差があることが分かった。前者の質問に「いる」と回答した人の割合は 27.5% (1901/6921) であるのに対して、後者の質問に「とても身近」と回答した人の割合は 18.9% (1309/6921) であった。この差についての違和感や、当事者本人から HIV 陽性であることをカミングアウトされたのか、それとも他者を通してアウティングされたのかによって身近度が変わるのではないかという意見があった。

「友達や知り合いに HIV に感染している人がいるにも関わらず、HIV の身近度が異なるのは気になります。近くにいっても身近じゃないと感じている人はどういう気持ちなのかな。」

「友達がそう (HIV 陽性) だけでも、自分は関係ないと思っているかもしれないですね」

「写真展をやっているときに、あの人もそう (HIV 陽性) だよなって言われました。直接聞いたかどうかで (印象が) 違いますね。アウティングって、深刻だと思う。噂で聞くのはネガティブな意識に繋がるのかも。」

HIV 陽性者のイメージが湧かないために検査を躊躇してしまふ

これまでに HIV 抗体検査を受けたことがない人の割合は 37.7% (2609/6921) で、また、受けない理由として「機会がない」を挙げた人が 63.3% (1652/2609) いた。この結果について、単純に受けるタイミングを逃しているという意見と、陽性だった時の気持ちが想像できずに躊躇してしまうのではないかという意見が聞かれた。

「世界エイズデー等で“みんなで受けよう！”と言われると“そうか、受けてみよう”と思うかもしれないけど、特にそういったことがなく、日々の生活に追われていると(検査を)受けずにきてしまうのかもしれないです。」

「自分からわざわざ受ける場所を調べてまで受けるようなものとは思っていない人が多いのではないかな。能動的に動かない。」

「死なないということはわかるけれど、実体験者(HIV 陽性者)の声で、終わった直後にどういった感情を持ったのか、服薬を初めてどう気持ちが変わったのか、直接話を聞けないとイメージつかないです。」

U=U メッセージはまだ浸透していない

HIV/AIDS に関する知識問題の中で、特に正答率の低かった U=U (Undetectable = Untransmittable) のメッセージについては、まだ情報が浸透していないという声があった。

「友人にカミングアウトされ、その時に話していた時に、この陽性者の友達は一生セックス出来ないと思っていました。」

「感染したら社会生活が終わると思っている傾向はあると思います。」

「僕の周りは U=U のことをみんな知らないです。U=U の考えが広がるのが検査に行く動機づけになると思います。」

薬物使用に係る結果はその種類によって解釈が異なる

「LASH 調査」では、覚せい剤やラッシュを「ドラッグ・薬物」としてまとめている。しかし、薬物の種類によって目的や使用者の傾向が変わるのではないかという意見があった。

「ドラッグの中に ED が入っているから判断難しいですね。ラッシュと覚せい剤が同列に並ぶと分かりにく

い。薬物によってセックスドラッグとして使われているかどうか違うと思います。覚せい剤を切りとって考える必要があると思います。」

若い世代のドラッグ・薬物使用の傾向が気になる

薬物目撃経験、被誘惑経験、使用経験はいずれも年代と共に必然的に上がるが、10代や20代といった若い世代でも薬物使用者が一定数存在していることに注目が置かれた。特に日本ではラッシュの法規制があったため、年代と使用薬物の関連を分析することが参加者より提案された。

「昔、ラッシュは雑貨屋みたいなのところのレジ横で売っていたじゃないですか。規制されて時間が経つので、若い年代の薬物目撃・被誘惑・使用経験が低いのは納得がいきます。むしろ若い年代で使っている子たちは、規制がかかっている中で何を使っているのか気になりますね。」

「10代の子が薬物を使っているのはショック。その子たちが最初に何を使ったのか気になる。」

2) 啓発活動のヒント

HIV 検査広告のメッセージをより現実的でポジティブなものに

HIV 検査の生涯受検の割合が6割に留まっていることについては、陽性になっても今までと殆ど変わらない生活が出来るというイメージが日本の MSM の間ではまだ十分に出来ていないことが指摘された。

「(今までは)恐怖を煽るような検査の広告が多かった。HIV に感染しても安心、なっても大丈夫だよというメッセージが始まったのは最近。それが伝わってない気がする。」

「早く分かったほうがいいんだよということをみんな分かっていない。」

「広告は行政が作っていることが多いから、汚いものにお金を出しにくい問題があるので難しさがあるんじゃない。暴言を言えば、(例え HIV 陽性になっても)生セックスやり放題だぜっていう方が、動くことであるのだけれども、それは行政的には言えないから、本当に届く、動かせる言葉が言いづらい問題はあるよね。」

ドラッグ・薬物の購入ルートは SNS 等のネットがメイン

本研究の量的調査では薬物の入手方法について確認していないが、参加者からは、SNS を含めたネット経由が多いのではないかという意見が多くあった。

「興味を持ってネットで購入し買ってしまった人かもしれないですね。」

「アプリやツイッターがあるので、そういう機会は多いと思います。その人の顔以外の普段の生活がわかるので、# タグとかも使って、出会うというのを聞いたことがあります。ツイッターやインスタを使って新しい人と出会う若者が増えていると聞きます。」

何かしらのゲイとして参加できる場所や活動へ関与していればドラッグ・薬物に触れる機会は増える

過去 6 カ月間に利用(参加)した MSM 向けサービスと薬物使用経験との関連を調べた結果、サービスを使用した人はそうでない人と比べて、薬物目撃経験、薬物被誘惑経験、薬物使用経験が高い傾向が明らかになった。このことについては、特にハッテン場やクラブなどの場所やサービスの利用により機会が増えると考えられるのではなく、何かしらのゲイとして参加できる場所や活動へ関与していれば、薬物に接触する可能性が高まるのではないかという考えが多く聞かれた。

「どこに行ったかというのではなく、ゲイ活動をしているかどうかで薬物目撃・被誘惑・使用経験が高くなるのだと感じます。実際にゲイの人が集まる場所に出かけているかどうか。ハッテン場が危ないという話もあるが、ゲイバーもハッテン場、クラブ、SNS の利用、コミュニティセンターなどもあまり変わらない印象ですね。」

自己肯定感が低いままだと薬物に逃避したくなる

逆境的小児期経験が多い人ほど薬物使用割合が高くなるという結果については、自己肯定感の低さが根底にあるのではないかという意見があった。自分に自信がもてないと生きていくことも辛く感じてしまい、結果的に薬物やリスクなセックスといった一時的な快楽に逃げってしまう気持ちに共感する声があった。

「自分の場合は、仕事で自信がついたり、所得があがっていくことが自己肯定感に繋がってやっていけてるんです。それがなかった学生時代は生きていくだけで常にしんどいとか、なんとなくもうやめたいみたいな感

覚がすごくあったので、こういうもの(薬物)に逃避したくなる感覚というか、普段の漠然としたストレスみたいなものが消えるという感じが、わかるな。自信もなく自己肯定感も低いまま刹那的などところに逃げて生きている人はたくさんいると思います。」

3) 啓発活動への提案

U=U に関する積極的な情報発信をする

HIV に感染しても治療をすればセックスをして相手に感染させないという U=U メッセージについては、積極的な情報発信が必要という意見があった。

「検査をして陽性だったとしても、誰かを傷つけない。検査をせずにどっちか分からない人がダントツで(他の人を)巻き込んでいるんです。それをあぶり出すみたいなメッセージはどう? 3つのパターンのイラストを用いて示すとか。①セックスをたくさんしているけれどちゃんと治療している(HIV陽性の)人、②セーフターセックスをして(検査もして)いる人、③怖いよ知りたくないよ〜って検査をしていない人、という3つのパターン。③が一番危ないというイメージ。一目でわかるタイプのポスターとかは大事かなって思う。」
「知識としてではなく、イケメンが沢山出演しているドラマ仕立てで、U=Uのメッセージを伝えられたら良いと思う。出会って、いざセックスをしようとした時に、陽性なんだけど、感染させる可能性がないんだよって、喧嘩もしつつ、それで理解して行くというなもの。」

多様化しているニーズに合わせて啓発活動の場所や媒体は複数あったほうが良い

啓発活動の媒体に関しては、若い世代に浸透している SNS はもちろん、雑誌やウェブサイトといった多様なメディアを使用して情報発信するのが良いという意見が多かった。

「最近はみなスマホなので、スマホで見やすいメディアを使って、展開の仕方を意識したほうが良いと思います。キャンペーンとしてちゃんとしたウェブサイトや動画もあったほうが良いし。沢山バズる仕掛け、リツイートされるような仕掛けを考えていくことも大事。いろいろな形でやっていくのが良いですね。」

「この世界は多様化しているじゃないですか。年代や地域(都市部なのか地方なのか)によっても違うし。一つの方法だけでやってもあんまり広まらないと思いま

す。U=Uが広がっていないのもそのせい。いろいろなことをわーっとやらないと浸透しない。」

健康的に自己肯定感を上げた人のメッセージを発信する

薬物使用や HIV 感染リスクの高いセックスといった一時的な快楽を求めてしまうのは、自己肯定感の低さと関係しているのではないかという意見が多く出た。そこで、MSM として生きるうえで自己肯定感が低かった人が、どういった健康的な活動をする中で自己肯定感が上がったのかという個人的な話を発信するのが良いのではないかという意見があった。

「もともとネガティブだったけど肯定的になった人の具体的な話を聞いてみたいです。セクシュアリティを受け入れられていないとか、ストレートとして(ストレートを演じて)生きていくことのストレスとか、色々と抱えている人たちが、何をきっかけにコミュニティに接したのか。様々なことがあって肯定的にとらえられるようになったとしたら、そのことで前は激しいセックスや薬物を求めていたけど、今は大丈夫になったのかどうかを聞いてみたいです。今もがいて苦しんでいる人にとって、そうした良い話は救われるし、勇気づけられると思う。どうしたら今の状況から抜け出せるのだろうという気持ちになれるんじゃないでしょうか。セックスや薬物で発散するのではなく、いい形で幸せに近づけると思えば良いなと。」

D 考察

1. 薬物を種類で分けた分析の必要性

参加者の多くは、薬物を種類に分けて集計する必要性があると指摘していた。「LASH 調査」では、英国で実施された先行研究(Daskalopoulou et al., 2014)に倣ってぼつき薬も薬物として分類した。しかし、「LASH 調査」でぼつき薬の使用割合が他の薬物と比べて高いことから示唆されるように、ぼつき薬を使用した回答者と、それ以外の薬物を使用した回答者の特徴には差がある可能性がある。

そもそも日本の一般集団における違法薬物使用の割合は欧米諸国と比べて低い傾向がある(和田ら、2000)。そのため、ぼつき薬と、ラッシュや覚せい剤といったいわゆる違法薬物をまとめて「薬物」として扱ってしまうと、違法薬物を使った集団の特徴が目立

たなくなってしまう可能性がある。よって、回答者のうち、「違法薬物」に手を出している集団を抽出し、その特徴について改めて分析する必要があるだろう。

特にラッシュは、2005 年頃から薬事法(現: 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律)に基づき指導・告発が行われ、2007 年からは指定薬物となり所持・使用が禁止された。さらに、2015 年 4 月からは、関税法上、指定薬物の輸入が禁止され、海外からも輸入ができなくなった。こうした規制強化の過程は、回答者の年齢による生涯経験の差を生み出していると考えられる。そのため、こうした社会背景を踏まえて分析をしないと、説得力を持つデータにはならないことが改めて指摘された。

また、一部の薬物に限って分析をすると、新たな要因との関連が認められる可能性もある。例えば、ラッシュや覚せい剤は HIV ステータスとの関連性が強いことが先行研究で示唆されている(Plankey et al., 2007)。薬物の種類によっては使用者の数が限られているため、どこまで詳細な分析が出来るか定かではないが、今後実施する価値はあると思われる。

2. 薬物防止の啓発活動を発信する多様な場所・媒体の活用

薬物防止に係る啓発活動を実施するにあたっては、多様な場所や媒体を活用する必要性が確認出来た。クラブやハッテン場の利用者のようなハイリスク集団をターゲットとして絞った啓発活動も一つの選択肢かもしれないが、クラブやハッテン場に限らず、何らかのゲイ活動(ゲイバーやゲイサークルの利用等)をしていれば薬物に触れる機会があるという結果に多くの参加者が同意していた。よって、様々なゲイ活動を行う MSM にメッセージが届くように、ハイリスク集団への啓発活動に加えて、SNS、ウェブサイト、ゲイ雑誌といった多様なメディアを介して、一般 MSM 集団に向けた情報発信も重要と考えられる。

特に若い世代はネットで薬物を購入しているという意見が参加者から聞かれたため、メディアでの啓発活動はより高い効果が期待できるだろう。中国の研究(Chen et al., 2015)においても、若い世代はより薬物使用の割合が高いことが示されており、この年齢層をターゲットとした薬物使用に関するモニタリングや介入も欠かせない。また、薬物使用は性感染症の罹患(Heiligenberg et al., 2012)や、抗 HIV 治療の順守

(Daskalopoulou et al., 2014)にも関連しているという報告があるため、医療機関での啓発活動も継続的に強化していく必要がある。

3. 自己肯定感を健康的に上げる当事者ストーリーの共有

薬物使用に関連する啓発活動として、自己肯定感を薬物以外の方法でどのようにして上げたのか、MSM 当事者や薬物依存症からの回復者のストーリーをビデオ仕立てで作るのが良いという意見が多数あがった。薬物依存症の人々は、満たされない心の穴を埋めるという自己治療目的で薬物を使用続けるといわれている (Hari, 2015)。日本の MSM においては、ゲイ・バイセクシュアル男性ゆえに感じる差別やいじめといった「生きづらさ」が薬物使用の背景にあることが、HIV 陽性者へのインタビュー調査から示唆されている (生島ら、2015)。そのため、実際に薬物使用以外の方法で自己肯定感を上げた MSM 当事者や薬物依存症から回復した人の声を発信することは、今現在薬物を使用している MSM、あるいは将来的に使用する可能性のある MSM によって特に重要である。

薬物を使用している MSM 全員が「生きづらさ」や「自己肯定感の低さ」を意識しているとは限らないだろう。だからこそ、当事者の生の声を届ける啓発活動によって、なぜ自分は薬物を使用しているのかという背景を振り返り、そしてもしそこに何らかの生きづらさがあるのだとしたら、それを薬物使用以外の健康的な方法で埋められることに気づくことが期待できる。内容としては、一般的な話に固執するのではなく、一人ひとりの「物語」を重視した啓発ビデオが有効と考えられる。

E 結論

本研究では、MSM のインフルエンサーを対象としたフォーカス・グループ・インタビューを通して、「LASH 調査」で得た結果の新たな分析方針が明らかになった。特に薬物使用に関しては、薬物の種類を分けて改めて集計し、性行動や逆境的小児期経験との関連を確認する必要がある。また、ラッシュ規制前の時代を体感している参加者から、年代に分けて使用薬物の種類を確認すべきという意見があがった。こうした MSM の動向に詳しい人の声を重視し、「LASH 調

査」で得た量的データを有効に活用する必要がある。薬物使用の啓発活動に関しては、クラブやハッテン場の利用者といったハイリスク集団だけでなく、SNS を含めた多様なメディアを介して、一般の MSM 集団を対象に行う必要性が再認識された。こうした啓発活動は、薬物使用防止や治療に係る単なる情報提供に留めず、薬物以外の方法でいかに自己肯定感を高めるのかという当事者の生の声も併せて発信することが求められる。

参考文献

- 1) 生島嗣、野坂祐子、岡本学、山口正純、中山雅博、大槻知子、肥田明日香、白野倫徳 . 2015. 生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成 26 年度総括・分担研究報告書 . 地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 : 189-202.
- 2) 生島嗣、野坂祐子、三輪岳史、大槻知子、山口正純、藤田彩子、及川千夏、井上洋士、大島岳、仲倉高広、林神奈、若林チヒロ、林夏生、樽井正義 . 2018. MSM の薬物使用・不使用に関わる要因の調査～男性とセックスをする男性向けの出会い系アプリ利用者の意識や行動に関する調査～ . 厚生労働科学研究費補助金 . エイズ対策研究事業 平成 29 年度総括・分担研究報告書 . 地域において HIV 陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 : 9-64
- 3) 和田清、菊池安希子、尾崎茂、菊池周一 . 2000. 薬物使用に関する全国住民調査 . 平成 19 年度厚生労働科学研究 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業分担研究報告 : 15-82.
- 4) Chen, X., Li X., Zheng, J., Zhao, J., He, J., Zhang, G. and Tang, X. 2015. Club Drugs and HIV/STD Infection: An Exploratory Analysis among Men Who Have Sex with Men in Changsha, China. PLoS ONE 10(5): e0126320.
- 5) Daskalopoulou, M., Rodger, A., Phillips, A.N., Sherr, L., Speakman, A., Collins, A., Elford, J., Johnson, M.A., Gilson, R., Fisher, M., Wilkins, E., Anderson, J., McDonnell, J., Edwards, S., Perry, N., O'Connell, R., Lascar, M., Jones, M., Johnson, A.M., Hart, G., Miners, A., Geretti, A., Burman, W.J. and Lampe, F.C. 2014. Recreational drug use, polydrug use, and sexual behaviour in HIV-diagnosed men who

have sex with men in the UK: results from the cross-sectional ASTRA study. *Lancet HIV* 1(1): e22-e31.

6) Heiligenberg, M., Wermeling, P. R., van Rooijen, M. S., Urbanus, A. T., Speksnijder, A. G., Heijman, T., PPrins, M., Coutinho, R. A. and van der Loeff, M. F. S. 2012. Recreational drug use during sex and sexually transmitted infections among clients of a city sexually transmitted infections clinic in Amsterdam, the Netherlands. *Sexually transmitted diseases* 39(7): 518-527.

7) Hari, J. 2015. *Chasing the scream: The first and last days of the war on drugs*. Bloomsbury Publishing USA.

8) Hunter, L. J., Dargan, P. I., Benzie, A., White, J. A. and Wood, D. M. 2014. Recreational drug use in men who have sex with men (MSM) attending UK sexual health services is significantly higher than in non-MSM. *Postgraduate medical journal* 90(1061): 133-138.

9) Plankey, M. W., Ostrow, D. G., Stall, R., Cox, C., Li, X., Peck, J. A. and Jacobson, L. P. 2007. The relationship between methamphetamine and popper use and risk of HIV seroconversion in the multicenter AIDS cohort study. *Journal of Acquired Immune Deficiency Syndromes* 45(1): 85.

F 研究発表

1. 論文発表

1) 大槻知子、生島嗣、三輪岳史、池上千寿子、樽井正義. ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダーの性の健康に関する調査. *GID (性同一性障害)学会雑誌*. 11(1):91-95, 2018.

2) 生島嗣. ゲイ・バイセクシュアル男性のネットワークと相談行動— HIV・薬物使用との関連を中心に—. *こころの科学*. 202:76-80, 2018.

3) 生島嗣. NPO 法人による HIV 陽性者とその家族への支援の現状と課題. *社会福祉研究*. 133:83-90, 2018.

2. 学会発表

1) 大槻知子、生島嗣、三輪岳史、池上千寿子、樽井正義. ゲイ向け GPS 機能付き出会い系アプリを利用するトランスジェンダー等の性の健康に関する調査. *GID (性同一性障害)学会*, 2019年、岡山.

2) 生島嗣、三輪岳史、野坂祐子、山口正純、大槻知子、若林チヒロ、林神奈、樽井正義. 若年 MSM の薬物使用開始と相談行動の考察— LASH (Love life And Sexual Health) 調査から. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

3) 山口正純、三輪岳史、大槻知子、生島嗣、樽井正義. HIRI-MSM を参考にしたわが国の MSM における HIV 感染リスクの評価—ゲイ向け GPS アプリ利用者の意識や行動に関する LASH 調査から. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

4) 本間隆之、岩橋恒太、貞升健志、長島真美、生島嗣、堅多敦子、市川誠一、今村顕史. HIV 検査相談会「快速あんしん検査上野駅 2017」の実施. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

5) 今村顕史、堅多敦子、岩橋恒太、生島嗣. A 型肝炎の流行におけるハイリスク層への効果的な啓発方法の検討. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

6) 佐藤郁夫、加藤力也、生島嗣、大槻知子、牧原信也、池上千寿子. HIV 陽性者のための「就職支援セミナー」から見えてくること. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

7) 河内宣之、福島一彰、田中勝、白阪琢磨、城所敏英、堅多敦子、生島嗣. MSM 向け出会い系アプリを利用し梅毒啓発と関連づけた HIV 検査受検勧奨の効果に関して. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

8) 福原寿弥、加藤力也、佐藤郁夫、池上千寿子、生島嗣. ベーシック講座「HIV ってどんな病気？」を担当して. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

9) 野坂祐子、生島嗣. HIV 陽性者を対象としたストレス・マネジメント・グループプログラムの実施と課題. *日本エイズ学会*, 2018年、大阪.

10) Ohtsuki, T., Ikushima, Y., Miwa, T., Yamaguchi, M., Ikegami, C., and Tarui, M. Sexual behavior and health of transgender people who are sexually active with MSM in Japan; an online survey through gay geosocial networking mobile application, LASH study. *The 22nd International AIDS Conference*, July 23-27, 2018, Amsterdam, Netherlands.

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし